

学会・研究会等の活動

◆条里制・古代都市研究会

1999年3月6日～7日

条里制研究会から表記の会名に変更して2回目、通算15回目の大会で、「古代都市と寺院」のテーマのもとに、平安京に東接する白川地域の地割の検討、検出例が増加している大和飛鳥での道路遺構を中心とした飛鳥京の空間構造に関する考察、近年調査成果が蓄積されつつある新羅王京の坊里についての検討と、特に古代都城についての研究成果が報告され、熱心な討議が行われた。二日目の事例報告では佐賀県肥前国庁の中枢部分の再調査、兵庫県和田山町加都遺跡の律令期の直線道路跡、美濃国武義郡衙跡である岐阜県関市弥勒寺東遺跡、藤原京に関わる紀寺跡、本薬師寺跡、それぞれ興味深い調査成果が報告された。(井上和人)

◆木簡学会

1998年12月5～6日の研究集会では、創立20周年を記念して、長屋王家木簡をめぐるシンポジウムを行い、渡邊晃宏「削屑からみた長屋王家木簡」、勝浦令子「長屋王家の米支給関係木簡」、櫛木謙周「長屋王家の経済基盤と荷札木簡」が、王家の家政機関や経済構造の実態解明に迫った。その他、館野和己「1998年全国出土の木簡」、藤川智之・和田萃「観音寺遺跡出土の木簡」、佐藤隆「前期難波宮出土の木簡」が出土木簡の事例を報告した(参加者約180名)。また『木簡研究』20号を刊行した(編集担当:渡邊晃宏)。

なお6月5～6日には、長野県立歴史館・長野県埋蔵文化財センターなどの協力の下、「7世紀の地方社会と木簡―屋代木簡をめぐる―」と題して、歴史館で特別研究集会を開催した。報告は寺内隆夫「信濃の古代と屋代遺跡群」、傳田伊史「7世紀の屋代木簡」、鐘江宏之「7世紀の地方木簡」、鶴見泰寿「7世紀の宮都木簡」、館野和己「律令制の成立と

木簡」(参加者213名)。(館野和己)

◆五斗葺瓦窯文字瓦の諸問題

1998年7月18日

古代では、篋や刻印によって瓦に名前、地名などを刻むことがある。その解釈は税物、製品の管理、作善の印などさまざまがある。関東地方では8世紀初頭の郷里制下に、瓦に地名を記す造瓦体制が成立する。1997年度の研究会では、国分寺造営期における様相を検討した。

地名を記す古式の瓦は千葉県龍角寺瓦窯に多量にあり、年代も7世紀代という。事実なら東国造瓦に関する通説と齟齬する。そこで各分野の研究者の参加を得て、龍角寺瓦窯の瓦について造瓦手法、様式、文字の特徴など総合的に検討した。その結果、文字瓦の年代は7世紀代に遡るが、8世紀の造瓦体制とは別、という見通しに達した。(金子裕之)

◆建築史談話会

1998年度は以下の研究発表と見学会を行った。4月30日:大森健二(建築研究協会)「大報恩寺本堂の復原について」・大報恩寺本堂見学会。5月16日:富島義幸(京大)「平安時代寺院建築における密教空間の展開」・島田敏男(奈文研)「正家庵寺の発掘調査」。6月27日:光井渉(神戸芸工大)「近世後期における神社造営と本殿形式の変化について」・藤沢彰(京大)「出雲大社の慶長度造営本殿について」。10月31日:黒田龍二(神大)「神社建築史の可能性と限界」・鈴木徳子(和歌山県)「金剛峯寺不動堂の襖障子調査報告」。11月21日:石山寺本堂見学会。12月12日:渡辺晶(竹中大工道具館)「特色ある日本の大工道具」・村田健一(奈文研)「東大寺転害門の調査報告」。(箱崎和久)

◆埋蔵文化財写真技術研究会

1998年7月3～4日に第10回総会、研究集会を行った。

7月3日:総会;参加者187名(含委任状)・講演;参加者106名「文化財写真の在り方」(田辺征夫氏 平城宮跡発掘調査部長)「マルチバンドデジタル記録法の開発」(三宅洋一氏 千葉大学工学部教授・林純一郎氏 三菱電機マイコン機器ソフトウェア) 7月4日:シンポジウム;参加者

131名「報告書・図録作成の諸問題」

司会:杉浦秀明氏 名古屋市立博物館

今回10回目の研究会を記念してシンポジウムを開催した。パネリストには報告書を作成するサイド、写真を撮影するサイド、印刷を担当するサイド、利用するサイドの5名の方に出席いただきディスカッションを行った。(牛嶋 茂)

◆考古科学的研究法からみた木の文化・骨の文化

本研究集会は、環太平洋の先史文化を、木器、骨角器や動植物遺存体を比較し、生業活動を比較することをねらい1999年2月9日、奈文研講堂において約150名の参加のもとで開催した。北米北西海岸の文化を、ブライアン・チズム(ブリティッシュ・コロンビア大学)に動物食・植物食についての成果を、デール・クロース(ワシントン州立大学)にホコ川下流域の発掘成果を、ランダル・シャルク(国際考古学研究所)に鳥類遺存体の分析の発表を受けた。ニュージーランドからフォス・リーチ(ニュージーランド博物館)、カレン・フレーザー(同上)に、台湾からリー・クァンチ(中央研究院)に、それぞれ骨角器と魚撈活動についての発表を受けた。日本からは佐藤洋一郎(静岡大学)に縄文時代のクリのDNA分析の結果、平口哲夫(金沢医科大学)から日本沿岸の先史捕鯨活動についての発表を得た。(松井 章)

◆陶磁器分析の研究会

考古学者と分析化学者が陶磁器の分析結果を考察した。窯跡から出土した各種の陶磁器資料、すなわち美濃・瀬戸・九谷・唐津など、および消費地からの出土品としての東京大学構内武家屋敷跡出土資料について、胎土とそのうわ薬などの分析を行った。分析手法は、①放射化分析による微量成分の組成比、②蛍光X線分析によるストロンチウム(Sr)・ルビジウム(Rb)・ジルコニウム(Zr)などの組成成分の定量的測定、③釉薬や染め付け顔料の定量的分析、④中国陶磁器の灰釉の鉛成分に着目した、鉛同位体比の測定などである。(沢田正昭)

◆平城宮第一次大極殿復原研究瓦研究会

1998年7月17日・9月10日・10月27日・

12月24日

本研究会は第一次大極殿復原設計のために行う研究会のひとつである。研究会の特徴は、実際にどのように瓦を葺くかということに主眼をおき、参加者も建築史・考古の研究者だけではなく、古建築の修理技術者や瓦製作者・施工者を含めた。本年度は4回の研究会を開催し、第1回では「鬼瓦と棟」・「模型の製作について」、第2回では「駝斗瓦と面戸瓦」・「隅木蓋瓦と朱のついた瓦」、第3回では「復原朱雀門の本瓦葺の施工と今後の設計における問題点」、第4回では「恭仁宮の瓦」・「第一次大極殿の本瓦葺についての一考察」についての発表と討論を行った。

研究会では、これまでになかった視点での議論がなされ、第一次大極殿の復原研究に貢献するとともに、さらに検討すべき点が整理され、今後の新たな研究の展開が予想された。第1回および第3回の研究会記録を出版した。(島田敏男)

◆藤原京研究会

本年度からはじまった大藤原京域確認のための調査研究の一環として、1999年3月27日に開催した。今回は奈良県立橿原考古学研究所(林部均)、橿原市教育委員会(竹田政敬)、桜井市教育委員会(橋本輝彦)、明日香村教育委員会(相原嘉之)、奈文研(安田龍太郎)が、これまでの条坊道路関係遺構の主要な発掘調査について報告を行い、事実関係の確認などの質疑・検討を行った。また、今後の京域研究を進めるにあたっての基礎資料として、各調査機関の協力を得、これまでの条坊遺構の調査成果を『藤原京研究資料(1998)』としてまとめた。

(安田龍太郎)

◆漢長安城日中共同発掘調査講演会

奈文研の特別研究「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する国際協力」の一環として行った前漢長安城桂宮2号建築遺址の発掘調査に関する報告会を、1998年7月18日、平城資料館講堂で開催した。講演は、劉慶柱(中国社会科学院考古研究所副所長)「漢長安城桂宮の発掘と中国古代宮殿の考古学的研究」と浅川滋男(奈文研)「平城宮樓閣宮殿

の系譜 - 台榭建築から麟徳殿まで」の2題である。劉副所長は、桂宮2号建築遺址の出土状況を報告するとともに、それを中国古代宮殿建築遺跡の系列のなかに位置づけた。一方、浅川は漢から唐に至る中国高層建築の展開を述べた上で、平城宮の内裏・西宮・東院地区でみつけた大規模総柱建物を、大明宮麟徳殿を和風化した樓閣の宴会場であろうと指摘した。講演会は180人の聴衆でにぎわった。(浅川滋男)

◆国際セミナー アンコール遺跡の謎に迫る

1993年度から始まったアンコール文化遺産保護に関する研究協力事業の一環として、ロンドン大学からエリザベス・ムーア教授と、プノンペン芸術大学からアン・チュリアン教授の2先生をお迎えして国際セミナーを開催した。

エリザベス・ムーア教授には、アメリカ航空宇宙局撮影の衛星写真をもとにした、アンコール遺跡群の水利施設の解析結果を発表していただいた。

アン・チュリアン教授には、カンボディアの土着土地神ニャクターをとりあげ、その現代における姿と信仰のあり方を紹介していただいた。(杉山 洋)

◆ドイツ・マイセンにみる歴史的な建物の修復

ドイツにおける歴史的な建物は、価値観の違いに段階を設けず一律に登録することによって文化財として扱われ、およそ90万件がその対象となっている。当然、修復件数も膨大である。とくに旧東ドイツ地域の各州は、ドイツ統一によって旧西ドイツの制度を取り入れたことから登録件数が一気に増し、修復事業が急増している。この国における保存への取り組みや修復の実態は、町並み保存を広め、近年に登録制度を導入し、それによって生じた課題をもつ我が国にとって、参考となるものである。今回、日独共同研究の成果のひとつとして実態調査を行った、歴史的な建物が保存地区として一体に残され修復事業が活発に行われている旧東ドイツ・マイセン市の保存修復を紹介し、行政、建築家、研究者などの参加を得て意見交換を行った。(木村 勉)

◆第18回国際ガラス会議(サンフランシスコ) 1998年7月5日~10日 アメリカセラミックス協会主催の国際ガラス会議が1998年7月5日から6日間にわたってサンフランシスコであった。

3年毎に開催されるガラスに関する全ての分野を網羅する大きな大会であり、総計800件以上におよぶ発表があり、このなかで「考古学・考古科学部門」において「日本出土のカリウム鉛ガラスに関する科学的研究」と題して口頭発表を行った。アジアからの発表は中国と私の2名で他は欧米諸国の発表がほとんどである。今回はガラス材質と風化に関する発表が多く、ハイブリッド樹脂の開発・利用が注目された。(肥塚隆保)

◆中国長白山の巨大噴火年代と渤海に関する年輪年代学的研究 本年度はマンシユウカラマツの炭化樹幹を8点採取した。しかし、年輪数が少ないため、良好な年輪データは得られなかった。渤海国時代の遺物を見る限り、わが国との結びつきを一層深く感じた。(光谷拓実)

◆四分遺跡発見の弥生人骨(飛鳥藤原第85次) 4号人骨は、石鏃が射込まれた可能性の高い3号人骨と、同一墓域に同時埋葬されていた。4号人骨に片山一道氏は、顔面、肩甲骨、寛骨と、胸の周辺部に多数の傷痕をみつけた。特に寛骨の幅13mmの刺創は、武器の断面形が両刃で、薄い刃物であったことを物語る。背後から襲ったものであった。それにしても腕に防御創がない。不意をつかれたのか、抵抗できない状態でやられたのか、のいずれかであろう。

(深澤芳樹)

◆金属製考古資料の科学的調査に関する研究会 1999年2月20日 COE研究の一環として奈文研主催の研究会を北海道大学で行った。北海道考古学会と北海道保存科学学会との共催である。アイヌ金属製資料を中心に、鉄製や銅製資料の材質と製作技法について、活発な討論があった。(村上 隆)